探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：熊野中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
熊野中学校	10	288
熊野第一小学校	22	535
熊野第三小学校	14	280

（R5121現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

本中学校区で設定した研究テーマは「小中学校のつながりをもたせた表現力の育成～開発した単元とルーブリックの見つめ直しを通して～」である。令和４年度に引き続き、児童生徒の「表現力」に依然として課題があるため、これまでに取り組んだ二つの取組をブラッシュアップしていきながら、「表現力」の育成を目指して、探究的な学習を推進していく。

具体的には、①小学校と中学校の総合的な学習の時間の学習がうまく結びついていない現状があることから、中学校と各小学校で重複する学習内容について詳細に共有・検討し、中学校で更に学習が深まるようにすること。②ルーブリックについても見直し・改善を行い、誰にとっても分かりやすく、より小中学校の系統性をもたせたものにしていくことに取り組む。

これらの取組を通して、小中学校で系統立てた探究的な学習を推進し、各校が育てたい資質・能力を育成していきたい。

（２）資質・能力の設定について

「メタ認知」「協働」「表現力」の３つの項目を３校共通のものとし、発達段階を踏まえて、各校で資質・能力を設定している。これを表に整理して示す。（【表１】）

【表１】各校の育てたい資質・能力

メタ認知		協働		表現力	
(熊野第一小)	(熊野第三小)	(熊野第一小)	(熊野第三小)	(熊野第一小)	(熊野第三小)
自分の成長に気付く力 わかる・できる力	向上心 分かる・できる力	協働する力	思いやり	自分の考えを表現する力	表現力
(熊野中学校) 自己分析 スキルアップ		(熊野中学校) 協働		(熊野中学校) 表現力	

（３）取組について

ルーブリックの見直し・改善

これまで【表２】に示すルーブリックを活用し児童生徒の表現力を見取ってきた。昨年度までの課題を踏まえて、改めて「表現力」をどう捉えるか、見つめ直しを行い、「自分の考えをまとめ、言語表現し、他者に伝える力」であると再確認した。それぞれの発達段階で育成したい「表現力」が全教職員・児童生徒に分かりやすく伝わるよう、【表３】に示す通り、明確化した。

【表２】熊野中学校区で育成する「表現力」のルーブリック①

目安	【表現力】自分の考えをまとめ、言語表現し、他者に伝える力。
中３	多様な考えを想定しながら、相手を説得できるように、表現を工夫して分かりやすく伝える。
中２	目的に応じて筋道立てて考え、根拠を明確にし、自分の考えを分かりやすく伝える。
中１	相手や目的、意図に応じて、資料を活用するなど効果的な表現方法を選んで書き表したり、伝えたりしている。
高学年	相手や目的、意図に応じて、資料を活用するなど効果的な表現方法を選んで書き表したり、伝えたりしている。
中学年	自分の考えや調べたことを、相手や目的を意識して書き表したり、伝えたりしている。
低学年	気付いたことや考えたこと、楽しかったことなどを、多様な方法（言葉、絵、動作、劇化など）で表現し、伝えている。

【表３】熊野中学校区で育成する「表現力」のルーブリック②

目安	【表現力】自分の考えをまとめ、言語表現し、他者に伝える力。
中３	相手を説得できるように、表現を工夫して分かりやすく伝える。
中２	根拠を吟味し、自分の考えを分かりやすく伝える。
中１	根拠を明確にし、自分の考えを分かりやすく伝える。
高学年	相手・目的を意識して工夫して伝える。
中学年	相手・目的を意識して伝える。
低学年	自分の言葉で自分の考えを伝える。

小中連携の取組

年度当初に担当者でルーブリックの検討を行った。その後も定期的に推進協議会を開催し、リーフレット作成や小中の学習の結びつき等を確認した。また各校の職員が相互に授業研究に参加し、意見交流を行った。

資質・能力の評価

「メタ認知」「協働」の項目については、各校でアンケート調査を行った。「表現力」の項目については、アンケート調査に加えて小中学校９年間を見通してのルーブリックを作成した。

２　実践事例

（１）熊野中学校

第２学年において、単元「あなたの選択が運命を分ける！備えと行動」を開発した。概要は次の通りである。

【単元の目標】 日頃から災害に備える意識を涵養し行動するとともに、災害時には迅速に避難し、中学生の自分たちにできる最大限の方法で命を守る行動をとることができるようにする。
【学習内容】 ①避難行動についての生徒アンケートから防災減災への課題意識をもつ。

②熊野町防災安全課の協力を得ながら、避難行動訓練ＥＶＡＧを行い、適切な避難行動についてシミュレートする。
③ＥＶＡＧでの困ったこと・解決策をグループで共有し、避難時に必要なことを考え、テーマを決定する。
④決定したテーマを基に、グループで協議しながら情報収集や吟味を重ねる。
⑤グループごとに発表し、今の自分にとって必要な避難行動・備えベスト３を決定する。

（２）熊野第一小学校

第６学年において、単元「国際人になるために」の開発を行った。概要は次の通りである。

【単元の目標】　世界の様々な国の特徴や現状から、共通点や相違点を見付け、多様な考えを生かして世界のみんなのよりよい暮らしの在り方を考えることができる。

【学習内容】
①JICA中国で世界各国の異文化に触れる。世界には様々な課題があることに気付く。世界全体で見ると、各国の生活・貧困・医療等に大きな差異があることに気付く。
②Ｇ７くまいちサミットを開き、サミット宣言（世界の人々がよりよく暮らすために目指したいこと）を作るために、児童が参加国（途上国を３か国含む）の代表の立場で、軍事・防衛や教育について情報収集する。
③１回目サミット：各国の状況や国ごとに考えた宣言を伝える。サミットで出た質問について追加調査を行う。
２回目サミット：個人で宣言案を考え、それを基に各会場で話し合い、くまいちサミット宣言としてまとめる。
④よりよい暮らしの在り方を、自分たちの暮らしと照らし合わせながら、生活を振り返り、今後につなげる。

（３）熊野第三小学校

第２学年において、単元「生きものなかよし大作せん」を開発した。概要は次の通りである。

【単元の目標】
生き物を探したり、飼育したりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、それらが成長していることや、生命をもっていることなどに気付くとともに、生き物への親しみをもって、生き物を大切にしようとすることができる。

【学習内容】
①生活経験や、これまでの学習と結び付けながら、どこに、どんな生き物がいるか話し合う。
②校庭を探検しながら、どこにどんな生き物がいるか調べ、見付けた生き物の飼い方を調べる。
③生き物の世話をし、分かったことを保護者に伝える。
④生き物についてまとめたことを伝え合い、今後、生き物をどうするか話し合う。

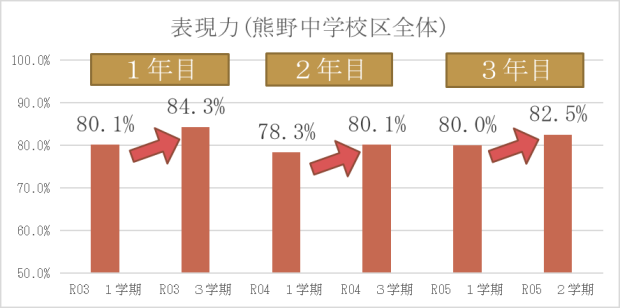
学習内容④では、飼っていた生き物を「戻す」「飼い続ける」「もう少し飼って考える」の３択から選ばせることで、一人一人が自分の経験や気付きを活かし、思いを表現することができた。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

まず、児童生徒の「表現力」の向上が挙げられる。
具体的には、
・直接体験を通して感じた湧き出る思いを自分の言葉で語る姿
・次の学びに繋がる探究への思いを自分の言葉で書く姿
・全校生徒で一つのものを創り上げ自信をもって表現する姿
など指導する教員すら感動させるような成長が随所に見られた。
これは、３校の共通課題が「表現力」であると焦点化し、共通認識を持った上で、児童生徒の興味関心に応じて柔軟に探究的な学習を進めていった結果であると考える。
さらに、教員の意識の向上も成果のひとつである。これは、小・中学校９年間を見通し、本中学校区として育成したい「表現力」のルーブリックを見直し、明確化したことによるものだと考える。
実際に児童生徒に対して「表現力」についての意識調査を行ったところ、【図１】のような結果となった。１学期では肯定的な評価をした児童生徒が80％だったが、２学期には82.5％となり、上昇が見られた。

【図１】熊野町立熊野中学校区全体の意識調査結果



（２）課題

本中学校区の課題は大きく３点ある。
１点目は、これまでの取組を今後どのようにつないでいくかということである。教員は毎年同じメンバーというわけではなく、春に入れ替わりがある。それぞれの学校の中で次年度の学年にどう引き継いでいくかが今度も課題になってくると考えられる。
２点目は、ルーブリックによる評価にとらわれすぎてしまう場面があったことである。ルーブリックに記述している児童生徒の姿を求めるあまり、児童生徒の姿が教員の想定を超える姿となった際にルーブリックとのギャップに苦慮することがあった。
３点目は、小中連携の継続である。この探究的な学習の指定も３年目を迎え、小中学校の３校が顔を合わせながら一つのことに取り組んでいくことは今年度が最終年度となる。そのような状況の中でも９年間を見通した小中連携を今後も継続していく必要がある。

（３）今後の改善方策等

まず、人材が変わったとしても形骸化させないために、これまで探究的な学習を積み重ねてきた実践を基に、目の前の児童生徒の興味関心を大事にしながら単元を見つめ直していく。
さらに、探究的な学習は児童生徒の興味関心から始まる単元開発であるべきである。ルーブリックにとらわれるのではなく、目の前の児童生徒の多様な姿に柔軟に対応していける教員でなければならない。ルーブリックは、絶対的なものではなく児童生徒の評価を見取るための一つの視点であることを理解し、活用していく。
そして、９年間を見通した児童生徒の成長のためにも、小中連携を継続していく必要がある。実際の授業実践を参観するなど児童生徒の学ぶ姿を基に各校の実践に活かしていく。